

選句「そこで焼いた魚を一切れ差し出すと、イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。」

- 1、今日は、ルカ福音書の24章の36節以下を選びました。この復活伝承物語はルカ福音書にしか出てこない物語です。その特徴が二つあります。①39節「まさしくわたしだ。触ってよくみなさい。」②42節「焼いた魚を…食べられた」というところです。ルカの著者はイエスの復活という出来事(あるいは事件)から、ルカの教会に何を告げたかったのでしょうか。現代的な答えを言い切ってしまうと、この二つは日常性の肯定だと私は受け取っています。
- 2、師と慕うイエスが危険人物として十字架上で殺され、屈辱と悲惨な死を遂げたことは弟子たちに殆ど再起不能の打撃を与えたに違いありません。食事が喉を通らない現実だったと思います。その絶望の現実の只中で、親しかった師の手足に触れることは交わりの喜びの確認です。そして食事を共にすることは生きる力です。それは我々が経験する最も日常的なことです。「復活」はギリシャ語で、「アナ(再び、反復、上に)スタシス(立ちあがる)」と言います。徹底的に傷めつけられた悲惨を一方で心に宿しつつも、それを携えてなおあたりまえの日常を再び生き始める力と喜びに押し出されるところに復活の秘儀があります。
- 3、ルカ福音書は、独自の食事の記事を収録しています。三つ挙げてみます。「金持ちとラザロ」(16章)。地上では富める者の食卓から落ちるものを求める貧しい病人ラザロは天上のアブラハム宴席につきます。「徴税人ザアカイ」(19章)。金と権力の亡者ザアカイはイエスと食事をして、「罪の悔い改め」に導かれ隣人から奪ったものを返し、隣人との交わりの日常性を回復して、新しい人生へと立ちあがります。「エマオの旅人」(24章)。師を失い絶望の二人の弟子たちは、宿の食事の席で道連れの旅人が「パンを裂く」その姿にイエスと出会います。いずれも、食事を通してイエスに出会う物語です。
- 4、「焼き魚」はガリラヤの庶民の日常の食材です。イエスはそれを食べることで、イエスが彼らと「再び」共にいること顯します。普通日常性は死んだら終わりです。今社会問題になっている多くの自殺者は、生活のやりくりや人間関係など、日常性が行き詰まり、病的に絶望して死を選びます。ご飯を食べることや、親しいものと言葉を交わす事など、ささいな日常性が肯定されていれば、死を急ぐことはなかったであらうでしょう。身近なものには「一緒にいる」わが身が否定されたと感じ打撃を受け、無力感に襲われます。だが、死にたいほどつらくても、なお生きていてよいのだ、と言うメッセージを与えるのがイエスの復活です。しばらく、重い、その日常性が「死にいたる病」を抱え込んでいるのも現実です。しかし、「復活のいのち」、がそれを相対化し、それに足を取られないために、ささいな日常性もが肯定されてい<sup>い</sup>のだよと、「一切れの焼き魚」はそれを象徴しています。私たちは、日常の些細な事をいと<sup>い</sup>おしみつつ、それでいてその些細な日常性を奪う、巨大な社会的、権力的、悪に対処しつつ生きてまいりたいと思います。焼き魚を食べるイエスにユーモアを感じつつ。